

## 「増水」と古代エジプト人の世界観

屋形 禎亮

古代エジプト人が、ナイル川の定期的な増水こそ、自分達の繁栄、それにも増して生活や生命そのものを保証するものであると認識していたことを明確に伝えているのが「ナイル讃歌」である。民衆暦のアケト（増水）季第1月1日、約70日間姿を消していたシリウス星が、日の出の直前に東天にふたたび姿を現わすと時を同じくして、増水の開始をつげる川のせせらぎの音が聞こえ始める。これを祝って、増水を神格化したハピ神を讃える祭礼が各地で盛大に挙行され、この讃歌から朗唱されたとみられる。注目すべきは神格化されたのはナイル川そのもの（イテル）ではなくナイルの増水（ハピ）である点である。讃歌はくり返し、増水が育む豊かな自然とそれが人々にもたらす恩恵を讃えている。増水は冥界から第一急瀨にある洞くつへとあふれてたものであるとされ、ハピ神の特徴は他の神とちがって特別な神殿を持たないことも強調されている。

増水が古代エジプト人の世界観に与えた影響は多岐にわたるが、ここでは天地創造神話と来世信仰だけにしぼって述べておく。多神教の国エジプトでは、貯溜式灌漑網の一単位に対応する地域的なまとまりが形成され、統一国家成立後は地方行政単位（州）となるが各州には州の守護神が主神として祀られ、それぞれ宇宙創造神としてみなされた。守護神の性格は起源の相違によってさまざまであるが、

天地創造以前には「原初の大洋」が存在し、その中から創造行為の舞台である「原初の丘」が出現するという点では共通している。明らかに増水が兩岸の平地をおおいつくしたのち、減水のはじまりとともに小高い丘が出現し、再び生命が芽生えるという、毎年くりかえされる現象にもとづいている。したがって神殿の至聖所は「原初の丘」を象徴する低い砂の丘の上に築かれるのである。毎年の増水が示すように、宇宙の創造によって創造以前の混沌がすべて解消されたわけではなく、「原初の大洋」はわれわれの世界の周囲に依然として存在し、秩序を脅かすとともに、新たな創造や活力の源でもあり、ファラオの正当性の依拠するところなのである。

来世信仰については、創造神話より間接的な影響といえるかもしれない。しかし、増水がもたらす黒い土と緑の大地のかなたに常に眼にする赤茶けた沙漠の死の丘陵との対比がこの世を楽園とみなし、死後もこの楽園の生活を永遠に続けたいとする強烈な願望を生み出し、そのための手段とそれを裏付ける信仰を執拗に追求した結果が古代エジプト文明の中核をなす来世信仰とその成果である墓とその副葬品をうみだしたといえよう。

(やかた ていすけ 信州大学)

カイロ市内を流れる  
ナイル川  
(撮影：川床睦夫)

